自然資源のチカラ

私たちが佐久の好きなところを聞かれたら、
「自然」と答える人は多いだろう。
そう、自然の様々なチカラが私たちに恵恵と喜びを与えてくれる。
青い空、白い雲、緑の山々、競い合うように咲き誇る花々。
佐久の自然は実に色鮮やかだ。
鳥のさえずり、川のせせらぎ、虫の声。
佐久で耳にする音は心が安らぐ。
自然からチカラをもらいながら、自然と手を取り合いながら、
暮らす佐久の人たちがいる。
そして私たちも――――。

川
全国に誇れる日本一の川がそこにある
【フライフィッシングクラブ トラウト 会長 角田智さん】 P23

水
安心、安全、おいしい佐久の水
【佐久水道企業団総務課 土屋修さん】 P24

山
山がいつもそこにある
【佐久山の会】 P25

星
見上げてごらん、佐久の星空を
【ハナたスターパーク天文インストラクター 埴根徹さん】 P26

野鳥
野鳥の楽園「佐久」
【日本野鳥の会会員 中澤和夫さん】 P27

花
花、花、花。花咲く、佐久
【中澤富士子さん】 P28

蝶
約133/275半分の蝶が佐久で見られる P28

全国に誇れる日本一の川がそこにある

フライフィッシングクラブ　トラウト 会長 角田智さん

学校よりも学べる川

千曲川やその支流は、私たち佐久の人間が誇れる川である。

何より私たちの生活に密接で、多くのものを育んできた。米作り、酒、魚の養殖、多くの産業に恩恵をもたらしてくれる。

また、こういった間接的な川とのかかわりでなく、川に直に接し、その魅力を知るのは、釣り人を始めとした"川の達人"たちだ。フライフィッシングクラブ「トラウト」の会長を務める角田智さんは、小さいころから家の近くに流れる霞川で遊び、川に親しんできた。角田さんにとって川は学校よりも重要で、川がより多くのことを学ばせてくれたという。

「生活の中に川がありました」

渓流魚の楽園、釣り人のメッカ

千曲川水系の素晴らしさは、故郷を離れたときに感じるように、他の川に行って初めて千曲川の良さを知るのである。釣り人の目からいえば、千曲川は魚の密度が濃い。なぜなら、魚が成育する条件が整っているからだ。森林環境が豊かな千曲川周辺では、広葉樹の林が多く、落葉した葉が川に流され沈殿し、それを虫が食べる。虫を主食とする渓流魚にとって、千曲川は"おいしく"棲みよい川といえる。こういった川の食物連鎖が円滑に行われている川は、やはり川の理想とすべき姿である。

千曲川水系では、イワナや、渓流の女王と呼ばれるヤマメなどの渓流釣りや、夏の風物詩にもなっているアユ釣りなど、季節を感じながらの釣りが楽しめる。その魅力を知る人たちが全国から押し寄せる釣りの「全国区」なのだ。

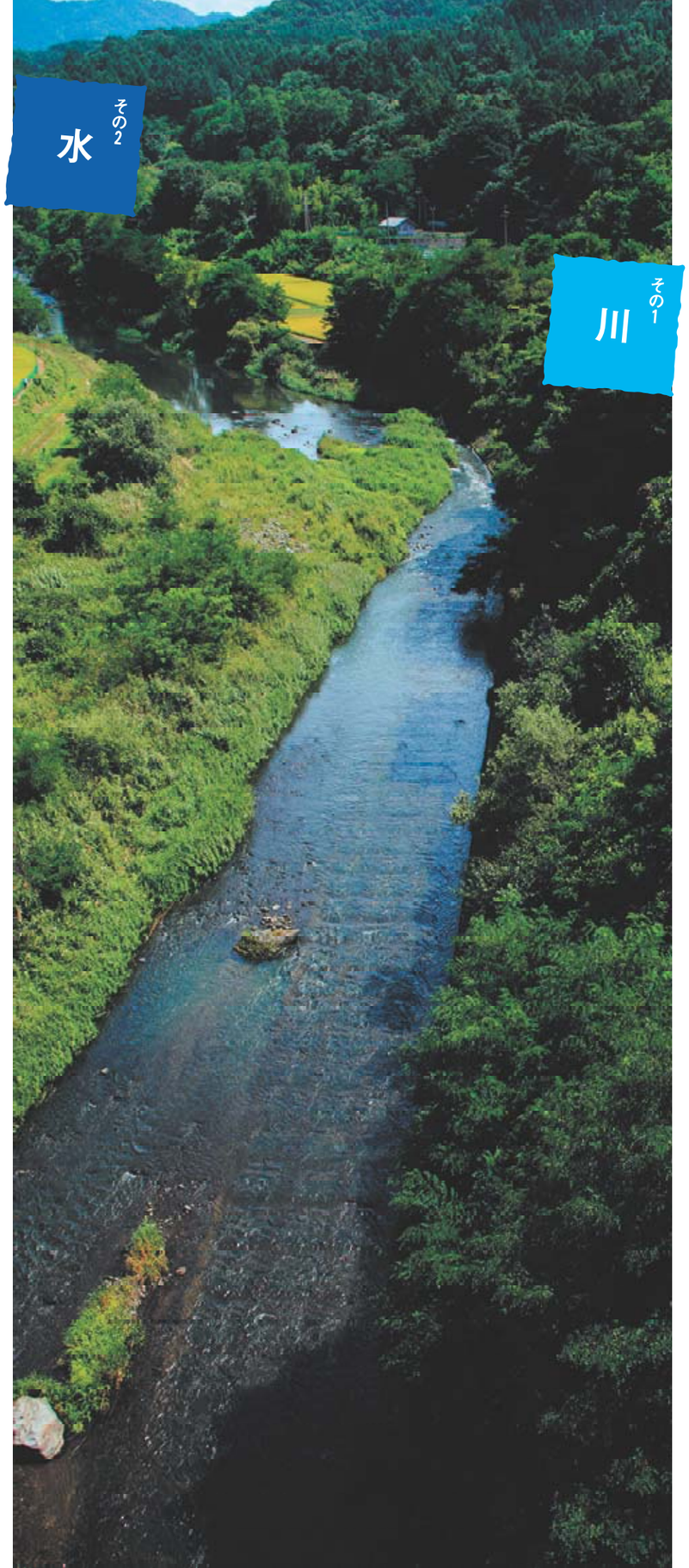
その全国区としての地位を支えているのは、地元漁業協同組合による行き届いた管理や、季節ごとに魚の増殖事業が行われていることも忘れてはならない。自然環境と人のチカラがうまく融合した結果が"渓流釣りのメッカ"を生んでいる。

川の音を聞こう、川の風を浴びよう

もちろん、川は釣り人だけのものではない。川の流れる音は、気持ちが安らぐ。例え仕事などで嫌なことがあっても、それを忘れさせてくれる。そんな効果もある。建物や道路など人工物に囲まれた場所から見る自然と、実際、川に行って"自然の中から見る自然"とはまったく違うものに感じるはずだ。川が与えてくれるものは、形のあるものだけではない。ただ、川風に当たっているだけでもいい。地元の川をもっと身近に感じてみよう。私たちは、川に行こうと思えば、すぐにでも行ける環境にあるのだから。

われらの日本一の川。

この大切な川を私たち人間のチカラで守る必要がある。この環境を守りながら、うまく付き合っていくことが望まれる。いつまでもこの豊かな流れが続きますように。



安心、安全 おいしい佐久の水

なぜ、おいしい佐久の水

佐久は水資源に恵まれた地である。その水源の種類は、佐久を縦断する千曲川や支流などの河川で、いわゆる地表水と呼ばれる水と、伏流水、井戸水といった地下水がある。それぞれがいろんな形で私たちに多くの恵みを与えてくれる

恩恵を与えてくれるだけでなく、何といっても佐久の水はおいしい。なぜおいしいか。その理由を、佐久平一帯に水道水を給水している佐久水道企業団局長の土屋修さんに聞いた。

「佐久を取り囲む山々に降った雨や雪が、地下のミネラルを含みながら、かつ長い年月をかけ濾過されます。やがて伏流水や湧水となり、それを水源から取水しています。そのため、消毒処理だけで飲用が可能になります」

おいしい水の要件として、10～100mg/ℓの硬度、20度以下の水温、適度に含まれるミネラルなどが挙げられる。佐久の水道水はこの要件を満たしている。市販されているペットボトルの水に負けない自信がある。

佐久水道企業団が特徴的なのは、浅間山水系と八ケ岳水系の2つの全く異なる水質の水を扱うことだ。浅間山水系の水は硬度（カルシウム、マグネシウムの含有量）が高い硬水、八ケ岳水系はまろやかな軟水。それぞれの長所があり、好みは分かれるところ。

水は環境保全から

また土屋局長は、長寿のまち佐久は、良質な水と関係あるのではないか、と持論を唱える。直接的、あるいは間接的に水を摂取しているのだから、これは十分納得できる。「浅間山水系と八ケ岳水系、どちらが長寿なのか。そんなデータが取れたらおもしろいですね」と土屋さんは言う。

おいしい水がいつでも飲める、水資源に恵まれていることを実感することが少ない。外から訪れた人が、「水と空気がうまい」と感じるように、普段当たり前のように享受していると、なかなか分からないものである。

佐久の水の素晴らしさを知ってもらうため、佐久水道企業団では水源地の施設見学などを行っている。水道から飲む水も十分おいしいが、滅菌前の原水はさらにうまい。自然に囲まれ、マイナスイオンも発するこの水源環境を見れば、そのうまさの理由も実感できるはずだ。

自然の恵みをこれからも享受し続けるために、佐久水道企業団では水源環境の保全に力を入れる。

おいしい水がいつまでも飲めますように。

上）佐久水道企業団局長の土屋さん。
下）水源のひとつ「大石水源」。

千曲川とその支流に棲む主な魚【イワナ（サケ科）】

千曲川水系では、最も上流に棲んでいます。きれいな水が大好きなのでとても暮らしやすい川です。釣り人にもモテモテで、千曲川水系は全国的に有名なスポット。だから、太公望が集まってくるのです。ちなみに名前の由来は、谷川の岩の多いところに生息していることから、「岩魚」と名づけられました。

その3 山

佐久を代表する荒船山。夕陽がオーストラリアのエアーズロックを思わせるその偉容を際立たせている。

山がいつもそこにある

―見る幸せ、登る楽しさ―

佐久山の会

双子山の山頂。草原状の山頂には、360度のパノラマが広がる。

山を見るとホッとしませんか

山といっても、いくつものとらえ方がある。水資源など生活に恩恵を与えてくれる山、景色として見る山、そして登る山だ。佐久ではいつでも自分たちのいる場所から山が見える。佐久は、北の浅間山から東の荒船山、西の八ケ岳、蓼科山へと山に囲まれている。山の景色は、私たちの佐久平の人間には潜在的な意識の中に埋め込まれているといっていい。例えば、県外に出掛け、帰ってくると浅間山の姿を目にしたとき。あの、どことなくホッとする、わが家に帰ってきたんだという安心感は、山の姿から与えられる気がする。佐久、そのものの景色なのだ。

気軽に登れる佐久の山

景色とは対照的に、近くにありながら、意外と遠い存在なのが、「登山」としての山だ。「なぜ、山に登るか」の問いに、「そこに山があるからだ」、とある登山家は答える。その意味では、佐久は山の愛好家にとってはこの上ない場所である。

「佐久山の会」のメンバーによると、佐久は里山など気軽に登れる山が多いという。平尾富士と呼ばれる平尾山は、ほとんど遊歩道が整備されているので登山というよりハイキング感覚。頂上は佐久平を一望でき、山桜もあるので春は花見の穴場とも。独特の形状をした佐久を代表する荒船山は、内山牧場などから見る景観も素晴らしいが、ゆっくり登っても2～3時間ほどのコースで初心者向けの山として楽しめる。

大河原峠から登る双子山は、30分ほどで頂上に登れ、草原状に広がる頂上からは、間近に見える蓼科山から、浅間山や荒船山、奥秩父の山々など360度の大パノラマが広がる。わずか登っただけで、まったくの別天地にいるよう。余力があれば原生林を下り、池めぐりを楽しむコースへ。エメラルドグリーンの水をたたえた双子池や、亀甲池など、手付かずの自然を満喫できる。

達成感がやみつきに

「佐久山の会」のメンバーに登山の魅力を聞いた。

「山登りは大変だが、苦労したときほどその達成感は大きいものになります。ヘリコプターで山の頂に立っても、景色はきれいと思うかもしれないが、達成感はないでしょう」。納得である。

達成感―。これがやみつきになるもと。だからこそ、皆、より高い山、困難な山へと導かれていくのか。一般のわれわれにとっては、そんな高い山はともかく、身近な山に足を運んでみようではないか。佐久がもっと今まで以上に好きになるはずだ。多少の疲れなんて、吹き飛ぶ景色が待っている。それと、山で食べる弁当はうまいこと間違いなし。美しい景色は、最高の調味料になる。たまには、自分の住んでいる佐久を山の上から見下ろしてみよう。

上）登山を通じて絆を深めた佐久山の会のメンバー（一部）
右）佐久商工会議所では「佐久の名山ガイド」を発行。ガイドの協力は佐久山の会。

左）大型天体望遠鏡を備える「うすだスタードーム」。真上にあるのが北極星。
右）アンドロメダ銀河。秋から冬によく見える代表的な天体。

その4 星

見上げてごらん 佐久の星空を

うすだスタードーム 天文インストラクター
坪根徹さん

星空観察に適した地

「最近、星を見ましたか」と聞かれたら、どう答えるだろう。多くの人は、なかなか星空を眺める機会は多くないのではないだろうか。しかし、佐久は星を見る環境とすれば、最高の条件が整っている。これを活かさない手はない。

そもそも佐久市になぜ、臼田宇宙空間観測所が造られたか。宇宙探査機に向けて動作指令を送信したり、観測データを受信するには、遠くからの微弱な信号電波を受け取れる場所でなければならない。妨害電波が少なく、空気が薄い標高の高い場所、そして日本有数の晴天率など、その条件にもっとも合っていたのが佐久市だった。

月周回衛星の「かぐや」や、平成22年6月に地球へ帰還し話題になった「はやぶさ」などは、臼田宇宙空間観測所で動かしていたという。その事実は地元の佐久市民に意外と知られていない。

観測所が設けられるということは、当然、天体観測についても適した環境ということになる。そこで多くの人に星を見てもらえる公開天文台として、「うすだスタードーム」は造られた。

空の川、地上の川

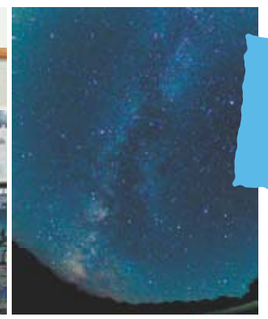
うすだスタードームでは星空観察のガイドを行う天文インストラクターの坪根徹さんが、星や宇宙の魅力を伝えている。星にまつわる神話やユーモアを交えた話で、星の世界へ誘う、"星空案内人"だ。ここで宇宙に興味を持った子どもたちが、宇宙飛行士訓練生の油井亀美也（川上村出身）さんに続き、宇宙への夢を実現する日がくるかもしれない。

もちろん、施設内の天体望遠鏡を使って見る星もいいが、肉眼で見る佐久の星空の素晴らしさを感じてほしい。とりわけ、夏の天の川は、息を呑むほど美しい。「この辺りで天の川を見ていないのは、千曲川を見てないのと同じぐらい格好悪いことですよ」と坪根さん。

「千曲川と天の川」。大きさの違いは別として、私たちは地上と空それぞれにすばらしい川を持っている。こんな財産を持つ場所がほかにあろうか。

「地元の人には、親戚や友人が来たら、佐久の名物の鯉や五郎兵衛米もいいですが、ふるさと自慢に星も入れてください、と話しています」と坪根さん。

佐久の名物、満天の星空をごらんあれ。



左）星空案内人の坪根さんは話題が豊富。右）夏の天の川。これはやはり肉眼で見たい。

その5 野鳥

野鳥の楽園「佐久」

日本野鳥の会会員 中澤和夫さん

野鳥には野鳥の数だけ楽しみがある。
1）コサメビタキ　2）イカル　3）メジロ　4）オシドリ　5）コマドリ　6）モズ　7）オオルリ　8）キビタキ　9）ウソ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

耳を澄ませば

朝、鳥の声を聞いて目覚める。

当たり前のようなこの環境の素晴らしさには、普段、なかなか気づくことがない。しかし、特別意識していないだけで、知らず知らずのうちに、癒やされているのだと思う。

文字通り鳥のように鳥瞰できる視野を持たないから分からないだけで、佐久は野鳥にとっては、天国のような環境を持っている。あそこにも、ここにも。耳を澄ませば、楽しそうな声がきこえてきませんか。

野鳥を追って半世紀

野鳥の魅力は何か。日本野鳥の会会員で、およそ半世紀に渡って野鳥を追い求める中澤和夫さんに聞いた。「野鳥は、ミステリアスな存在。思いがけない場所で、思いがけない鳥にであったり、筋書きのないドラマを見ているようなもの。だから50年近く、追い続けてきても飽きることがない。自然界は常に新鮮」

野鳥の立場で見ると、佐久は特殊な地域だという。まず、鳥というものは空を飛ぶものであり、最も鳥たちが大切なのは、羽をきれいにしておくこと。きれいな羽に保つためには、体を洗う水が必要で、当然、飲み水としても欠かせない。鳥には、いかにきれいな水があるかということが、とても重要な要素になる。

佐久は北に上信越高原国立公園、東に妙義荒船佐久高原国定公園、南に秩父甲斐多摩国立公園、西に八ケ岳中信高原国定高原と、2つの国立公園と2つの国定公園に囲まれている。そのため人工の手が加わらない、自然のままに保護され、安定した自然環境を保っている。その4つのエリアに降る雨や雪が、山岳の土壌でろ過され、伏流水となってこの地を潤し、この天然の水資源が、鳥にとってはまさに命の水となる。

さらに千曲川の流れる低いところでは600m、山岳の高いところで2500mと標高差が2000mほどあり、水辺、森林、山岳と垂直分布が広範囲に及ぶ。それぞれの場所に生息する鳥が違うので、それだけ野鳥の種類も豊富になる。

海鳥が佐久にいる

また、日本のへそ、あるいは「日本で海から一番遠い地点」の佐久であるにもかかわらず、海鳥が見られることも少なくない。なぜか。それは、佐久では淡水魚を飼う池や、田んぼなどの水面が多く、上空から見ると、あたかも海岸の干潟のように見える。これは、海鳥が日本列島を渡るときに、思いがけない立ち寄り場所になっているのだという。佐久にいながら、時折、カモメ類、シギ類が見られるのはそのためだ。こんなことからも、佐久は他に類を見ない野鳥の宝庫といえるのだ。

東京電力小諸発電所第一調整池は、飛来する水鳥のための浮島や、野生鳥獣保護のためのエコロジーエリア、散策路などが設けられ、野鳥観察に適した場所になっている。

佐久商工会議所では、「佐久は野鳥の宝庫」を発行。中澤さんが執筆を担当し、佐久で見られる120種におよぶ野鳥を紹介している。

その6 花

花、花、花。花咲く、佐久

中澤富士子さん

花には花の数だけ喜びがある。
1）サクラソウ　2）ミズチドリ　3）マツムシソウ　4）マツムシソウとクジャクチョウ　5）アサマフウロ　6）クガイソウ　7）イブキジャコウソウ　8）ネジバナ　9）コミヤマカタバミ

1	2	3
4	5	6
7	8	9

心を豊かにしてくれる

花は人間の心を豊かにしてくれる。古来から花は人間の生活のそばにあった。人は、花を詩に、歌に、あるいは絵画に描くなど、それは場所を問わず、花を愛でる世界共通の認識がある。

そして、私たちの佐久には、生活している周辺から、道端、畑や田んぼに至るまであらゆる場所に花を見つけることができる。近くに山があるので、高山植物などたくさんの種類の花がある。誰が言ったか、「花咲く、佐久」とはうまく言ったものである。

佐久の花は、色がきれい

長野県自然観察インストラクター、NPO法人浅間山麓国際自然学校インタープリターとして活躍する中澤富士子さんに佐久の花について聞いたところ、「佐久の花は、色合いがきれい。澄んだ美しさがある」ことを全体的な特徴として挙げてくれた。また、標高差のある佐久では、内山牧場周辺で草原の植物が見られ、美笹自然観察園では湿地に咲くものが多く、大河原峠周辺では亜高山植物といったように、車ですぐ行ける範囲の中で、実にさまざまな植物に出会うことができるということが素晴らしい。

コスモスで有名な内山牧場は、もちろん一面に広がるコスモスも素晴らしいが、春から秋にかけて、ゆっくりと花を楽しめる場所。中でも、中澤さんが格別な思いを持つのは、「アサマフウロ」。フウロでは、花が一番大きく、色も鮮やかで美しい。"アサマ"の名が付いているが、浅間山麓では絶滅に近い状況にあり、佐久市でもごく限られた場所にしか群生していない。そんな貴重な花もコスモスに比べて気づく人がそれほど多くない。以前は、草と一緒に刈られてしまうこともあった。しかし、この花の美しさに魅かれた中澤さんは、アサマフウロを残してもらおうと佐久市に相談し、その熱意が実り、アサマフウロを見るための遊歩道も整備されている。

地元の老人クラブのお年寄りが苗を植えていたことをきっかけに、地域ぐるみの活動になっていったコスモス街道もしかり。佐久の人たちの花を愛する強い気持ち（チカラ）が、佐久の花々を守っている。

佐久商工会議所では、「佐久高原の花ばな」を発行。中澤さんが執筆し、佐久で見られる花を大河原峠、美笹自然観察園、内山牧場のエリア別で紹介している。

その7 蝶

133/275　約半分の蝶が佐久で見られる

マニアが喜ぶ蝶が豊富

浅間山、蓼科山、八ケ岳に囲まれた佐久は、蝶の宝庫だ。全国で275種いるといわれる日本の蝶の中で、佐久平で133種もの蝶が生息している。日本の蝶の約半分が、見られる地域なのだ。車で数分のところに、ヒメギフチョウ、ウラギンシジミ、オオミドリシジミ、アイノミドリシジミ、フジミドリシジミなど、蝶マニアが聞けば喜ぶであろう、希少種ぞろいの場所がある。

蝶が多くの人を虜にするのは、カラフルな色彩の翅（はね）の美しさと、その種類の多さ。そして、花と蝶の組み合わせほど、相性のいいものはない。

たくさんの蝶と花に彩られた佐久は、色彩豊かな高原のまちである。